

王府「おもろ」と伝統「空手」について

與儀清春[王府おもろ・沖縄小林流・沖縄本部御殿手]

概要、王朝禮樂と空手同舞台発表に関連して「おもろと空手」特に
王府「おもろ」と「本部御殿手」の歴史概略について、

「小林流」と「型ナイファンチ、松村パッサイ」について

仲村健、金城竜人、照屋賢治、比嘉正芳、梶川英昭 [沖縄小林流]

概要、松村宗棍から、小林流への歴史概略と特色について
演武・型「ナイファンチ」と「松村パッサイ」の解説

3、「空手と古武道」と型「鐘川の二丁鎌」について

野原由將 [沖縄剛柔流空手道]

概要、「琉球拳法唐手道沿革概要」について、「空手」と「古武術」について
演武・型「鐘川の二丁鎌」の解説

4、「劉衛流」由来と型「黒虎(ヘイクー)」

花城正樹[劉衛流]

概要、劉衛流の名前の由来、『一子相伝』・『門外不出』について
演武・型「黒虎(ヘイクー)」解説

5、「上地流」・型「完手和」について

新垣国広[上地流振興会]

概要、上地完の源流に関して・祖師上地完英と上地流の特徴について
演武・型「完手和、普及型Ⅲ」解説

6、「本部御殿手」と型「サイの手」について

喜納兼次郎 [沖縄本部御殿手]

概要、「本部御殿手」の由来、上原清吉師に承継、「本部流」から「本部御殿手」に
演武・型「サイぬティー」解説

7、「空手の文化的側面へのアプローチ」 ～古典琉球舞踊に隠された「空手」の手の

追求から～ 大城康彦 [剛柔流・古典舞踊・組踊・王府おもろ]

概要「うちなぬもーいんかいえ、からていぬていぬていぬいっちょんどー」(沖縄の舞は空手の手と共通している)、「がまく、あていふあ、むちみ、ちんくんち」の文献的考察

王府「おもろ」と伝統「空手」について

與儀清春

序、 琉球のグスク時代から、第一・第二尚氏王朝誕生の 500 余年前に至る時代にかけて、「おもろ」も「手」も生み出された古典文化と言えます。

「おもろそうし」と「空手」は、共に琉球王朝の歴史文化遺産である。琉球文化としてかなり古いものであり、琉球古典芸能文化の基ともいえるかと想います。

1、 琉球王朝と「おもろ」と「本部(流)御殿手」の歴史概略

王府おもろ主取

初代安仁屋親雲上(1616~1701)を祖として、第 13 代安仁屋真苺(1837~1916)迄 1879 王府終焉(琉球処分)まで続いたこととなります。

本部(流)御殿手

初代本部朝平(尚弘信本部王子朝平 1.655-1687)を祖として、第 11 代本部朝勇(1856-1927)迄、1879 王府終焉(琉球処分)迄続いたこととなります。

本部(流)御殿手主と安仁屋親雲上おもろ主取と、役目の違いはあったにせよ王府儀式に於いては共に座したと想えます。また、共に尚貞王即位した時代から発祥し、1879 年の琉球王朝終焉(琉球処分)まで続いたこととなります。

2、 「王府おもろ」と「手」の近世 -

1879 年(明治 12 年)、琉球王朝最後は第 19 代尚泰王(1841~1901)。本部(流)御殿手主は第 11 代本部朝勇(1857~1927)で終えたこととなりますが、秘伝武術、一子相伝称されているが、本部家外の上原清吉に継承されています。

おもろ主取は第 13 代安仁屋真苺(1837~1916)から、琉球古典研究者の山内清彬に継承されています。

本部御殿手主は第 11 代、おもろ主取は第 2 代、ほぼ同時代の 200 年余を琉球王府に仕えた事となります。

*おもろ主取第 11 代安仁屋筑親雲上(1781~1853)は「武者タンメー」と称され、手の使い手だったとのようです。

3 「王府おもろ」と「空手」の現在

本部(流)御殿手主は第 11 代本部朝勇(1857~1927)から、上原清吉(1904~2004) 師に継承され、現在は、「沖縄本部御殿手空手古武道」として、活動しています。

おもろ主取第 13 代安仁屋真苺(1837~1916)から第 14 山内盛彬(1837~1916)師に継承され、現在は(第 15 代継承者)安仁屋真昭(19. . . 年~)氏に継承され、「王府おもろ謡きゆる保存会」として、活動しています。

-那覇市文化協会・空手文化部会舞台発表に臨んで 2015・平成 27 年 3 月 17 日(火)・

[小林流]と型[ナイファンチと松村パッサイ]について

小林流空手道

演武 仲村健、金城竜人、照屋賢治、比嘉正芳、梶川英昭

1、小林流の由来について

琉球国王最後の武術師範として仕えた松村宗棍師は「武士松村」と云われ、多くの高弟を育成、その一人の糸洲安恒師に継がれた。

その糸洲安恒師から知花朝信師に継承された首里手を他の流派と区別して伝統を守るため、知花朝信師が「沖縄小林流」と命名された。

2、小林流の特色

小林流の構えや呼吸法は他の流派に比べて自然であり、力の入れ方や抜き方に特徴がある。力を体の内側から外側へと入れることで、瞬間的に力を一点に集中させることができる。これによって呼吸の乱れや無駄な筋肉疲労がなくなり、動作の敏・性が増す。小林流の「受け」はただ防御して相手の攻撃をさばくのではなく、さばいたらすぐに攻撃に移ることで防御即攻撃をめざしている。

3、型「ナイファンチ初段(2.3段)」

小林流では鍛錬型と称され、足腰を鍛錬し、筋骨を発達させることに主眼が置かれている。

初段から三段までである。二段、三段は糸洲安恒師の作である。

型「松村パッサイ」

パッサイは攻防の動作が変化に富む。

松村宗昆氏が得意とした型を松村パッサイと称し、小林流の名型の一つ。

なお、糸洲安恒氏が得意とした型を糸洲のパッサイと称す。

参照、沖縄小林流空手道協会資料。

剛柔流と、演武型「鐘川の二丁鎌」

野原由將 [沖縄剛柔流空手道]

1、「琉球拳法唐手道沿革概要」から

剛柔流開祖、宮城長順の「琉球拳法唐手道沿革概要」のなかで「唐手とは何ぞや」と唐手の概要が述べられている。

その概要とは、「曰く、身に寸鉄を帯びず、平時においては心胆を練り、寿康を計り。急に際しては身を護るの術なり。即ち多くの場合、肉弾を以て敵を倒す事を原則とす。然りと・も、気に臨み、変に応じ、器物を併用すること、亦無きに非ず。」

この「唐手とは何ぞや」の説明のなかで、「肉弾を以て敵を倒す。」とある。すなわち素手(徒手空拳)で相手を倒す事が基本ではあるが、しかい時と場合によっては「変に応じて器物を併用する。」すなわち、手に道具(棒やサイなど)を持って応戦することもあると述べている。

3、「空手」と「古武術」

現代では、「空手」と「古武術」を分けているが、本来は、沖縄の「手(てい)」のなかに空手も古武術も包含されているものだと「概要」から推察できる。

古の時代、「手」の修行は一子相伝で公には稽古がされなかったと聞く、当時は「空手」と「古武術」も体系化されてなく、幾つかの「空手の型」と、限られた「古武術の型」が秘伝としてそれぞれの家に伝承され、一括して「手」と呼称されたものと思われる。

「空手」は、大正・昭和にかけて沖縄の先生方が東京・大阪・京都などの名門大学で指導し、体系化するなかで飛躍的に振興・発展したが、それに反比例するかのように「古武術」が衰退していった。

それに危惧の念を抱いた屋比久猛伝先生・平信賢先生が「古武術」を収集研究し、「空手」と同じように体系化して「琉球古武道保存振興会」が設立された。ここに「古武道」として独立した名称が認知されたものと考えられる。

収集体系化した「古武術」は8種類の道具で42の型が整理し記録・保存されている。

3、演武・型「鐘川の二丁鎌」

古武術で唯一「刃」がついている「鎌」の形、「鐘川の二丁鎌」…

【劉衛流】由来と型「黒虎(へイクー)」

花城正樹【劉衛流】

1、劉衛流の名前の由来

清朝の武官養成所の師範『劉龍公』を始祖とする流派である。1819年、那覇の久米村に生を受けた仲井間憲里が19歳の頃、武者修行のために中国へ渡り、劉龍公の元に入門。その時の名を『衛克達』と言った。

劉龍公の『劉』と『衛』を併せてできたのが現在の劉衛流の名称となった。

2、一子相伝、門外不出

当時、閉鎖的な風潮の中で現代のように流派を名乗ったり、弟子を取ったりすることはなく、劉衛流は『一子相伝』、『門外不出』のものとなる。

憲里から三代目の憲孝、五代目の憲児へと受け継がれていく。

3、門外不出から門戸解放へ

四代目の仲井間憲孝の元に足しげく通った若き佐久本嗣男。

入門を願いに訪れたが許可は出なかった。しかし、しつこく通い続け、憲孝は一子相伝、門外不出だった劉衛流を公開することに踏み切った。

そして5年目にして、初めて劉衛流の型を伝承されたと言われている。

4、型『黒虎(へイクー)』の解説

上地流の源流

型「完子和／普及形Ⅲ」について

上地流空手道振興会 新垣国広

1. 上地流の源流

上地流空手道は上地完文(明治 10 年~昭和 23 年)師を始祖とする流派で、小林流(首里手)、剛柔流(那覇手)、上地流(唐手)として、共に沖縄空手の三大流派と称されている。

源流は中国福建省福州市在の南派少林拳。祖師上地完文は、1897 年(明治 30 年)20 歳、福州に渡り 13 年間にわたって周子和に師事、虎拳(パングキヌーン[半硬軟]拳法)が基礎であり、首里手・那覇手・泊手などの手(ティール・沖縄武術)の流れでなく本当の意味での唐手の流れを汲んでいます。

中国南派術拳・蔡家拳の中興の名手、蔡肇功の流れを汲むともいわれる。

2. 上地流の特徴

帰国後、1926 年(大正 15 年)和歌山市に「パングキヌーン流空手術研究所」として伝授を本格化した。1940 年(昭和 15 年)流派名を「上地流」と改める。

上地流の拳質は「龍虎鶴の拳」とされるが、技法上の特性は眼光鋭くし、手技、足技を駆使して一撃必殺・完全防禦の「眼精手？」や「硬軟自在」を技術標語とする。無駄な動きや誇張された動作のない、破壊力を伴った流麗でスピーディーな攻防を特徴とする。

3. 演武・型「完子和」普及型Ⅲについて

平成 24 年に中学校体育武道必修科目が教育課程に位置づけられ沖縄県では、「空手」が必須科目に選択され、宗家二世の上地完英が創案した「完子和」が普及型Ⅲとして、平成 25 年に制定された。

なお小林流系の普及型Ⅰ・剛柔流系の普及型Ⅱは 1941 年(昭和 16 年)沖縄県の制定である。

「本部御殿手」と型「サイぬティー」について

喜納兼次郎

沖縄本部御殿手

1、「本部御殿手」の由来

「本部御殿手」は琉球王府の本部御殿に古くから伝わる一子相伝の武術です。明治政府の廃藩(1879年、明治12年)により本部家「本部御殿」最後の当主、第11代本部朝勇師(1857~1927)が幼少の頃(5歳より15歳まで)本部御殿に古くから伝わるその武術を継承し、更に武芸の幅を広げ、当時の首里手、泊手の大家に師事、独自の型を含め多数の型を習得しておりました。

2、上原清吉師に承継。「本部流」から「本部御殿手」に改称

大正時代に入り、上原清吉師(1904~2004)は血縁ではなかったものの、朝勇師に見込まれて大正15年に本部家以外で初めてその技を継承し、昭和36年「本部流」と命名しております。「本部流」の術理は空手、古武道、御殿手の三つの体系から成り立っており、空手、古武道には十数種の型、御殿手には、剣術、槍術、薙刀術、取手、舞方など多くの技が伝承されております。

さらに、昭和45年に上原清吉師は名称を「本部御殿手」に改め、活動団体として「本部御殿手古武術協会」を設立しております。

その後、平成24年に「沖縄本部御殿手空手古武道協会」が設立され、上原清吉師の嫡男である上原健志氏を会長に選任し、普及活動を行っております。

3、演武・型「サイの手」について

「サイの手」は、上原清吉師が生前演じられた形や技の概念及び理念を踏襲しつつ、定型化されずに潜在していた形の発掘及び体系化により生み出された、本部御殿手の古武道の形の一つである。

空手の文化的側面へのアプローチ

～古典琉球舞踊に隠された「空手」の手の追求から

大城康彦 剛柔流

1. 「うちなーぬもーいんかいえ、からていぬていぬていーぬいっちょんどー」
(沖縄の舞は空手の手と共通している)

昭和 27 年 4 歳から琉球舞踊の手習いをはじめた。ほとんど「ミーナリチチナリ(見習り聞習り)」であったが、小生の師も他の大きな先生方も、折に触れて「うちなーぬもーいんかいえ、からていぬていぬていーぬいっちょんどー(沖縄の舞は空手の手と共通している)、ていぬちーくとうむてい、もーいんすんどー(空手の稽古を念頭に舞踊の練習もするんだよ)」と言われていた。前の浜、鳩間節、二才踊り、武の舞、などは誰でも一見すればなるほどどうなづけることではあった。

2. 「がまく、あていふあ、むちみ、ちんくんち」の文献的考察

大節(女踊り)のどこに、『空手』が存在しているのだろうかとの疑問はずっと頭の隅に残り、踊りの稽古の中で見つかってくるものなのだどうかの期待があった。このような時期に、たまたま、平成 11 年(50 才)に伝統空手と出会い、琉球舞踊と空手の関係についての実践的研究にのりだした。空手の日々の稽古の一方、『がまく、あていふあ、むちみ、ちんくんち』などをキーワードに文献的考察も進めた。

3. 古典琉球舞踊、空手、座禅、祈り、平和の希求

西暦 5 世紀頃にインド仏教僧の達磨大師が中国の嵩山少林寺において、中国禅宗の開祖とも言われ、また動禅として、南インドのタミル武術(カラリパヤットの源流)も伝えて、その後の中国空手?の原型ともなった。座禅と空手(動禅)の関連性は、『丹田(上/中/下)/(頂/底),心身一如、呼吸(呼気/吸気)』をキーワードに、行住座臥(座禅/動禅/生活禅)により追求されて、禅三昧から『祈り』の世界へと広がって行く気配を感じている。

すなわち、古典琉球舞踊、空手、座禅、祈り、平和の希求が根源的にひとつに繋がっていると思われる。